

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「イオン、ベルマーク付きPB 15年春までに100種類」
- 2) 「ローソン、コンビニで介護支援 ケアマネ配置 運動指導も」
- 3) 「納豆菌でエコな洗剤 “界面活性剤”も激減」

1) 「イオン、ベルマーク付きPB 15年春までに100種類」

イオンはベルマーク付きのPB商品を販売する。第1弾で、このほど49種類の学習帳を1日に発売した。今後は学校で消費が多い鉛筆や地球儀にも広げ、2015年春までに100種類を導入する。ベルマークは収集した学校の備品購入などへの支援金になる。社会貢献につながる消費意識は高まっており、PB商品でも対応する。

ベルマーク運動はへき地の学校に通う子供への教育設備支援を目的に1960年に始まった。2006年に大学や、公民館などの生涯学習施設の参加も可能になり、集票点数は07年度から7年連続で増えている。協賛企業が商品につけたベルマークを登録参加の学校などで集めてベルマーク教育助成財団に送ると、点数がその団体の「預金」となり、必要な時に備品購入代金として使える。1点あたり1円と換算する。

ベルマーク教育助成財団によると、商品にベルマークを付ける協賛企業は約60社。大手小売企業はファミリーマートに続いて2社目で、文房具のPB商品では初めて。

イオンはグループ各社が参加する社会貢献団体「イオン1%クラブ」を通じ、国内外で学校建設や被災地などを支援している。消費者からは「ベルマーク付きのPBを購入したい」との要望が多く協賛を決めた。ベルマーク運動は東日本大震災の被災地なども支援対象としている。

学校教育では12年12月に消費者教育推進法が施行され、ベルマークやフェアトレードなど社会貢献につながる消費活動についても学ぶ機会が増えた。「エシカル（倫理的）消費」への関心が高まるなか、オイシックスやローソンなどが低カロリー商品の販売を通じて発展途上国を支援するなど、日常の買い物を通じて社会に貢献できる商品が増えている。

ベルマークをPBに付けるというのは企業としてグッドアイデアだと思う。子どもたちが身近なものを通じて、「集める」という行為から興味を持つようになり、それが社会貢献につながるという連鎖は良い流れだ。親世代も自分たちが昔集めたことを思い出し、子どもとの会話の中で懐かしい話も出てくるのではないか。小さなマークが社会と家族のコミュニケーションをつなぐと思うと、商品と交換できること以上に大きな役割を果たしていると思う。

2) 「ローソン、コンビニで介護支援 ケアマネ配置 運動指導も」

ローソンは高齢者や居宅介護者を支援するコンビニエンスストアを2015年から出店する。昼間はケアマネジャーが常駐し生活支援の助言をしたり、介護に必要なサービスや施設の紹介・あっせんをしたりする。高齢者が集うサロンのようなスペースを設け、健康維持に必要な運動の機会も提供する。高齢化が進む中、身近なコンビニの役割をもう一段広げる。

埼玉県を中心に老人ホームなど介護福祉サービスを手掛けるウィズネットが、フランチャイズチェーン加盟店となり、1号店を埼玉県川口市に15年2月に開く。ウィズネット以外の介護事業者とも組み、まず3年で30店出し、以後は順次増やしていく考えだ。

コンビニでは介護事業者の抱えるケアマネジャーが、必要に応じて入浴などのデイサービスや有料老人ホームといった施設を紹介する。2号店以降はフィットネスクラブ大手のルネサンスと協力し、店内に運動をする場所も確保。健康状態に即した運動の指導も計画している。

商品面ではつえやオムツなどの介護用品の見本やカタログを置いて注文を受け、店頭で受け取れるようにする。ウィズネットの高齢者向け弁当宅配サービスを使い、ローソンの通常の商品も宅配してもらう。

高齢化社会が進んでいる中、ついにコンビニ業界が介護業界に足を踏み入れた。コンビニ特有の手軽さが合わさることで、介護というイメージでの負担が減るかも知れない。高齢者が集い、運動ができ、自身で健康への意識を高めて行ける場所になると嬉しい。

3) 「納豆菌でエコな洗剤 “界面活性剤” も激減」

洗剤やシャンプーなどに添加される石油由来の界面活性剤の使用量を納豆菌の作る物質で劇的に減らせることが9日までにわかった。茨城県つくば市の産業技術総合研究所（産総研）などが発見した。すでに量産化にも成功しており、これによって環境負荷を低減したり、原油市場が高止まりするなか、コスト削減効果などによる企業の国際競争力の強化も期待される。

界面活性剤は、洗剤などに含まれる「洗う」成分として知られる。台所用洗剤やシャンプー、化粧品のほか、機械、建築、土木分野など幅広く使用されており、プラスチックと並ぶ石油製品でもある。ただ、石油を原料とする界面活性剤は水質などを通して生態系へ悪影響を及ぼすなどとして、環境面での問題点も指摘されている。

研究では、界面活性剤に納豆菌からできた7つのアミノ酸が環状につながった「サーファクチン」と呼ばれるペプチドを加えて、その洗浄効果を調べた。この結果、界面活性剤の量を100分の1に減らしても、その効果が変わらないという結果が出た。

産総研の井村知弘主任研究員は「環境面に加えて、製品設計の自由度が上がる」と説明するほか、同研究所では「界面活性剤の量を減らせる分、抗菌機能だけの洗剤に香りの持続といった機能を加えることも可能になる」としている。さらに皮膚など人体への刺激が少ない商品開発も可能になるという。

今回、産総研と共同研究を行った化学メーカーのカネカは、すでに皮膚への刺激が少ない点に着目して、化粧品向けにはこの物質を量産済みで、今後は「機械の洗浄用といった工業用洗剤などへの用途展開も可能になった」（同社）としている。

さらに、企業にとっては高止まりする原油価格がコスト要因となっているほか、原油市場の価格変動リスクが経営戦略を立てにくくしている側面もある。このため、石油の使用を劇的

に減らすことのできる今回の発見は、企業の“石油リスク”を軽減して競争力を高める可能性もある。

人体にやさしい、環境負荷を減らせる、石油を使わなくてすむ、コストが抑えられる。それが納豆の力で！というのはどれをとっても私たちにとってメリットでしかない。夢の様なニュースに嬉しくなったが、デメリットは無いのかなど冷静に様子を見ながら、早く実際に使用してみたいと思う。今後も科学の力でこのような常識を変える商品の誕生を望みたい。